

書評

山本達也 著

『舞台の上の難民』

——チベット難民芸能集団の民族誌——

(法蔵館、二〇一三年)

名和克郎

(東京大学東洋文化研究所教授)

本書は、チベット亡命政府の「首都」であるインド、ヒマラヤ・チベット難民芸能集団の調査を行い、やがてその一員となった著者が、自身の経験を主な元手として紡ぎ出した意欲作であり、序章と、終章および後書きとに挟まれた九つの章から構成されている。第一章で本書全体の前提となるチベット難民、ダラムサラおよび音楽に関する基本的な情報が提示された後、第一部「伝統を生きる芸能集団」(二〜五章)、第二部「現代を生きる芸能集団」(六〜八章)、第三部「伝統と現代のはざま」(九章)という三部構成からなる本論が置かれ、合間に民族誌的断章とも言うべき四つの Interlude が挿入されている。

第一部が中心的に扱うのは、チベット難民芸能集団 TIPA の伝統的演目である。第二章では、TIPA が用いる

伝統概念の分析から、それが変化・創造を許す層と、変化が許されず喪失が問題にされる層の二層からなることが論じられ、また後者における継承の困難さが指摘される。第三章では、TIPA の演者による他の難民社会およびチベット本土の芸能集団の評価の検討と、公演地や主要な観客によって大幅に異なる TIPA の公演内容の分析から、演者達の主体性と、常にそれに同在する文化的社会的拘束性の間の両義性が指摘される。第四章は、近年最も重要なチベット文化として語られることの多いチベット歌劇ラモとその祭典シントンが、いかにして現在の形に変容し、特権的に重要な地位を占めるにいたったかを、英文による各種論考の通時的分析から明らかにする。第五章では、前章での分析により析出された、ラサ中心主義に立脚した難民社会のナシヨナリズムという問題を引き継ぎつつ、TIPA の演目設定において生じる地域的偏りからマンネリズムにいたる諸問題と、ダラムサラのチベット人聴衆が TIPA に向ける、批判から無関心にいたる多様なまなざしとが検討され、外国人聴衆とチベット人聴衆の要求する方向性のずれと TIPA 自体の組織上の位置とが、演者達をアリアに直面させていることが指摘される。

第二部は、TIPA の下部組織であるチベタン・ポップのバンド「アカマ」の活動に焦点が当てられる。まず第六章で、チベタン・ポップの歴史と難民社会におけるその

「意味」、およびアカマ・バンドの歴史を概観した後、第七章で、この「新たな文化」が生まれる実際の場、アカマのCD製作過程の現場におけるさまざまな軋轢を含む出来事が分析される。ここでのキーワードは「接触領域」であり、個々の音楽家の志向や方針の違いに起因するもの、「文化」間の差異が問題とされているもの、および、その場に存在しない「聴衆」を想定した「先取りされた接触」が取り上げられる。第八章は、完成したCD『アカマ2005』およびアカマのライブに対する人々の多様な評価や行動と、メンバー、元メンバーと、そこに参加できない者の双方が持つアカマに対する評価から、TIPA内部のチベタン・ポップのバンドたるアカマが、その展開の中で抱えるにいたったさまざまな可能性と困難が浮き彫りにされる。

第九章のみからなる短い第三部は、TIPAの男性演者テンジンが、折々に著者に語ったTIPAやチベット・ナシヨナリズムに対するある種の距離感の表明と、他者との衝突によって彼に突発的に生じた、集団意識と結びついた怒りをめぐる出来事とを記述し、「文化」「伝統」「アイデンティティ・ポリティクス」といった大きな語りによって回収しつくせない領域の存在を提示する。

序章および終章では、強固な集団的アイデンティティの存在を前提とする既存のチベット難民研究を批判しつつ、

著者自身と、著者がダラムサラで出会った個々の人々との具体的な関係を元手に、「チベット難民」という枠組から自らを切り離すことはできないが、その枠組が想定するものからは常にずれつづけている人々の生をよりよく描き、ひいては「私たち」の生き方をも変えていこうという、本書の企図が述べられる。第一章で導入される「チベット難民ハビトゥス」という概念は、本書を通じて分析の細部において直接用いられるわけではないが、本書で展開されるさまざまな議論を結びつける役割を果たしている。

以上、本書の魅力を最大限伝えるべく、評者なりの要約を試みた。本書は二〇一三年度第三回地域研究コンソーシアム賞登竜賞を受賞しており、本書が如何に優れているかについてはその講評の中で論じられる筈である。以下では、そうした評価を前提として、より批判的な観点から本書の内容についていくつかの指摘を行いたい。

本書の一つの特徴は、民族誌的記述の大半が、ごく断片化されたエピソードの集積からなっていることである。あるシークエンス全体が論じられることはInterludeを例外として稀であり、レコーディング・セッションの記述においてすら、引用されるのは数ターンの会話に過ぎない。その結果読者は、リズムカルかつ効率的に情報を得ることができ、一方、著者によって分断され再配置された記述に全面的に依存せざるをえず、さまざまな出来事の間に流れた

答の長大な時間の感覚を失うことになる。他方、本書が焦点を当てる身体表現や音楽について、言語を用いて、あるいは他の手段で、可能な限り明示的に伝えていこうとする記述への意志が感じられないのも意外であった。歌詞や旋律の詳細な分析はなく、「文化」間で生じたりズムのずれを具体的に示す努力もなされていない。現地で通用する「わざ言語」の分析も乏しい。用いられるのはむしろ著者自身の持つ日本語のわざ言語であり、それらは屢々透明に翻訳されるものと想定されているのだが、これは民族誌的には危険な手法である。

他方、残念ながら本書には、語彙の選択から論理展開にいたるまで、不正確、不十分、あるいは不整合と思しき部分が残っている。ここでは第二章を例に、そのごく一部を指摘したい。著者はそこでTIPPAの人々が用いる伝統概念を分析し、それが「創造や加工、変化が許される層と、許されない層」の二層からなることを指摘する。だが、「伝統」に当たるチベットの語彙については注で説明されるのみで、「文化」と訳される語彙との異同や、多言語状況下における概念の微妙な影響関係に関する議論はない。加えて、著者の見出した二層が「チベット難民社会での伝統概念」一般にどの程度適用可能かは十分に検証されていない。他方、具体的な事例から見えてくるのは、伝統の喪失をめぐる状況認識が、TIPPAの演者間ですら必ずしも

共有されていないという事態である。さらに著者は、ごく近年の調査にのみ基づいて析出されたこの二層の存在を實質上かなり固定的に本質化してしまい、両者の境界が通時的に移動したり、それ自体として問題化される可能性を議論に組み込んでいない（著者は別章で「どこが創造、もしくは喪失に該当する領域かは動態的なものは見出し難い）。第二章の分析中にそうした動態的な視点は見出し難い。しかも、以上の議論を元に著者はデールに対する批判を展開するのだが、管見の限りこれは全く無効かつ不当なものである。「伝統とは、継承された知恵との対話において歴史的に地位付けられた諸個人が決断することで絶え間なく再創造されるものである」という彼女の議論は、「伝統は変わっていくものだ」という主張や、単純な「創造の語り」では全くない。「ある領域において変更を許さない」ということもまた、継承された知恵との対話における諸個人の決断であるのだから。この部分に限らず、著者には、既存の研究に対して、その可能性を最大限読み取るうとすることなく、自らの議論の枠組の中に強引に位置付けて簡単に批判してしまう傾向があるように見受けられる。

その他、一見シンメトリックな三部構成にもかかわらず、「伝統」と「近代」の非対称性故に各部のタイトルが十分に機能しておらず、とりわけ「伝統と現代のはざま」では、書かれている内容とも齟齬があること、「ひとと

してのディアスポラ」という用語自体、研究者による強度の囲い込みを含むこと等々、詳細に論ずべき点は多いが、紙幅が尽きた。最後になお一点だけ指摘したい。

評者がこの民族誌をいま一つ積極的に評価できない背景には、すでに言及した一冊の著作、著者よりほぼ一〇年前に、人類学者としてまたヤク・バンドのキーボード奏者として、ダラムサラの音楽をめぐる人々とかかわった、ケイラ・ディールの民族誌の存在がある。著者は、本書の各所で時に援用し時に批判しつつも、なぜか正面からその成果の全体を自らの仕事との関係で位置付ける作業を避けている。だが、本書で著者が提示した論点のかんりの部分はすでにディールによって指摘されており、他方、著者によるディール批判の多く、たとえば、「記述と対象のあいだに生じうる協同性に目を向けていない」「表象に関わるチベット難民たちが、自分をチベット人だと確定している、という前提を共有している」といったものは、ディールの民族誌の全体を丹念に読み返してみれば、ほとんど言いがかりとしか言いようのないものである。評者は、本書の記述や分析にはディールの議論に回収できない部分が多々含まれていると認めるが故に、こうした態度を極めて残念に思うものである。もちろん、以上は評者の私見であって、著者には著者の言い分があるだろう。だが、最低限次のことは言える。本書の達成を十分に評価するには、先行する

ディールの民族誌との詳細な比較検討が必要不可欠である。

●参考文献

Diehl, Keila (2002) *Echoes from Dharamsala: Music in the Life of a Tibetan Refugee Community*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

● 著者紹介 ●

- ① 氏名……名和克郎(なわ・かつお)。
- ② 所属・職名……東京大学東洋文化研究所・教授。
- ③ 生年・出身地……一九六六年・東京。
- ④ 専門分野・地域……文化人類学、南アジア・ヒマラヤ地域。
- ⑤ 学歴……東京大学教養学部(文化人類学専攻)卒、東京大学大学院総合文化研究科博士課程(超域文化科学専攻・文化人類学コース)修了。
- ⑥ 職歴……東京大学東洋文化研究所・准教授(二〇〇〇～二〇一三年)。
- ⑦ 現地滞在経験……ネパール(一九九三～一九九五年、トリブパン大学ネパール・アジア研究センター・research scholar等)。
- ⑧ 研究方法……主に、参与観察を中核とするフィールドワーク。
- ⑨ 所属学会……日本文化人類学会、日本南アジア学会、American Anthropological Association、Association for Nepal and Himalayan Studies等。
- ⑩ 研究上の画期……こわゆる冷戦終結期の一連の出来事。
- ⑪ 推薦図書……Marilyn Strabern, *The Gender of the Gift: Problems with Women and Problems with Society in Melanesia*. University of California Press, 1988.